

㊦ 前提として必要な予備知識

1. 九州王朝の存在

1.1 中国史書に見る倭国又は倭人の記載事例

古代の日本について文字による記録は我が国に無いので 隣の中国史書を見る

- ① 「周の武帝の時(BC1045 前後)倭が万里朝貢す」 (後漢書東夷伝)
- ② 「周の成王の時(BC1040 前後)倭人暢を貢す」 (論衡)
- ③ 「濊は倭の北に在り、倭は燕に属す」(BC300 前後) (山海経)
- ④ 「秦の始皇帝(BC220 前後)方士徐福を遣わし、童男女数千人を将いて海に入り蓬萊の神仙を求めしむれども得ず、徐福 誅を畏れて敢えて還らず 遂にこの州に止まる」 (史記) / (後漢書倭伝)
- ⑤ 漢時代(BC200)「楽浪海中倭人有り、分かれて百余国をなす 歳時を以て来たり献見すと言う」 (漢書燕地)
- ⑥ 後漢時代「建武中元二年(AD5)倭奴国 貢を奉って朝賀す 倭人自ら大夫と称す 倭奴国 南界を極む 光武賜うに印綬を以ってす」 (後漢書倭伝)
- ⑦ 後漢時代「永初元年(AD107)倭の国王帥升等 生口百六十人を献じて 請見を願う」 (後漢書倭伝)
- ⑧ 三国時代(238~266)「倭国への行程、倭国の社会と習俗などについて 詳細な記述有り」 (魏志倭人伝)
- ⑨ 倭の五王時代(413~502)「倭の五王の朝貢と倭王への授爵について 記述有り」 (晋書、宋書、南齊書、梁書)
- ⑩ 隋時代(581~618)「日出ずるところの天子についての記述と 裴世清の遣使について記述有り」 (隋書倭国伝)
- ⑪ 唐時代(618~907)「倭国と日本国、白村江の戦いなどについて記述有り」 (旧唐書 列伝、倭国伝、日本国伝)

尚それぞれの中国王朝の都の所在地は 現在の西安周辺、洛陽、南京である

1.2 中国史書に見る倭国は近畿大和王朝を指しているのか？

定説では九州王朝を認めず 全ての時代を通じて この倭国は大和王朝としているが 果たしてそれが正しいのか吟味してみよう

後漢時代までの当否検証は 裏付け資料が少ないので後回しして 三国時代以降を考える

(尚 王朝の言葉には血脈の含意もあるので政権と言い換える方が妥当かも知れないが 一応慣例通り 王朝としておく)

(1) 魏志倭人伝

記事内容は 魏の出先機関の帯方郡から倭国への行程、倭国の社会と習俗、女王卑弥呼の政治、

倭国からの遣使、狗奴国との不和、魏の塞曹掾史張政の長期派遣、卑弥呼の死、耄与の女王即位と魏への朝貢などである

この時の倭国（通称 邪馬台国）の所在をめぐって江戸時代から論争が続いており 今なお決着していないが 前回の講演で詳細に検討し、博多湾岸であると結論したので 本日もこれを取り “魏志倭人伝の倭国は 近畿の大和王朝ではなく 九州（筑紫）王朝であった”とする

(2) 晋書、宋書、南齊書、梁書 沈仁安（北京大学教授、日本古代史部会会長）の著書から

中国側四王朝の史書に いわゆる倭の五王の それぞれの遣使と綏爵の事例が記述されている

倭王贊； 晋の安帝に朝貢/宋の高祖に朝貢/宋の太祖に朝貢

倭王珍（贊の弟）； 宋の太祖に朝貢/8年後朝貢して綏爵

倭王濟（珍の子）； 宋の太祖に朝貢して綏爵/8年後朝貢して綏爵（大將軍に昇格）

倭王興（濟の子）； 宋の世祖に朝貢/2年後に朝貢して綏爵

倭王武（興の弟）； 宋の順帝に朝貢して綏爵/翌年朝貢（上表）して綏爵（大將軍に昇格）

倭王武； 齊の高帝に朝貢して綏爵（大將軍）

倭王武； 梁の武帝に朝貢して綏爵（大將軍）

定説ではこれら五王に大和朝の天皇を充てているが 大和朝のどの天皇もその年次と業績が中国史書の内容に合っていない（因みに 贊には15代応神、珍には16代仁徳、濟には19代允恭、興には20代安興、武には21代雄略）

どの天皇を充てるか学者によって若干相違しているが 雄略を武に充てるのには異論が無い その雄略ですら 日本書紀の崩御年(479)の23年後に 梁に朝貢(502)したことになる

倭王武が宋の順帝に差し出した上表は名文でその全文が宋書に残されており そこには高麗との厳しい戦いを記しているが 日本書紀の雄略紀には朝鮮半島への派兵記事が無い 又 同じ文に父と兄を同時に喪った（戦闘で？）とも書かれているが 雄略の父安興と兄木梨輕皇子は別の場所を時を異にして死んでいる

この時代（5世紀）の近畿は巨大古墳を築いており確かに力を蓄えていたが 未だ国際交流を活発に進める状態には至らず これら五王に大和の天皇を充てるのには無理がある 一方これら五王が九州王朝の君子とすると 全てがしっくり収まる

又 この時期には 中国でも朝鮮半島でも度々戦乱が起きて中国では王朝交代が相次いだが上述のように 天子の世代替わり、王朝替りの際にタイムリーに倭国からの遣使が実現したのは 彼我間にかなり情報交流があったことを意味している 近畿大和ではこのように密な情報把握は無理だったと思われる

尚 朝貢の相手はいずれも南京に都をおく南朝であり 当時の華北は 異民族五つを含め 五胡十六国時代と呼ばれる乱世であった

(3) 隋書倭国伝

隋書では倭国を倭国（大倭の発音からか？）と記述している

「倭国は百済新羅の東南に在り、百済新羅は皆倭を以って大国にして珍物多しと為し 並びにこ

れを敬仰し恒に使いを通じて往来す」

「開皇二十年(600)倭王あり 姓は阿母、字は多利思北弧、使いを遣はして闕に詣る 王の妻は鷄彌と号す 後宮に女六・七百人有り」

「大業三年(607)倭王多利思北弧 使いを遣はして朝貢す その書に曰く“日出ずる処の天子 書を日没する処の天子に致す 恙無きや” 帝(煬帝) これを見て悦ばず 蛮夷の書無礼なる有り 復た以って聞するなかれと」

「大業四年(608)文林郎裴世清を遣わして倭国に使いせしむ 筑紫国に到りて 東して秦王国に到る 筑紫国より以東皆倭国に附庸す」

「阿蘇山有り 故無くして火起り天に接する 俗以って異となし 因って禱祭を行う」

「清 其の王に謂って曰く “朝命既に達せり 請う即ち塗を戒めよ”と 是において宴亨を設け以って 清を遣わす」

筑紫に到ったこと、そこに阿蘇山が有ったこと、そこで朝命を果たしたことから 倭国の首都が筑紫に有ったことは明らかである 塗を戒めるとは旅行の準備をすることで 倭王に対して武装による警戒を要請しており 通常自国に帰る時にこのような記述はしないから 倭国の首都から更に先の東方の地域への旅行を意味している

裴世清は筑紫に加え難波へも訪れたことになる (中国史書の冊府元龜にその記事がある)

「復た使者をして 清に随い来って方物を貢せしむ」

「此の後 遂に絶つ」 (618年 隋が滅亡)

一方 日本書紀では

「推古十五年(607)小野妹子を大唐に遣はす 鞍作福利を以って通事とす」

(唐が隋を倒して立国したのは 618年でありこの時点では唐は存在しないから隋を指している)

「推古十六年(608)四月大唐の使人裴世清 妹子臣に従ひて筑紫に至る 難波吉士雄成を遣はして大唐の客裴世清を召す 唐の客の為に新しき館を難波の高麗館の上に造る 六月裴 難波津に泊まる 八月裴 京(飛鳥)に入る 九月裴 帰国の途につく」

定説では 聖徳太子が問題の書(隋の煬帝を怒らせた)を送ったとしているが 上述の日本書紀(裴世清への応対を詳細に記述)に 天皇や多数の群臣の名が出ていても 肝心の皇太子の名は出てこない 皇子・諸王・諸臣として一括扱いである (十七条の憲法などは推古十二年の記事)

大和朝の天皇は女性の推古天皇であり 筑紫と難波の両方の現地を訪れた裴世清が 倭王を見間違えるはずが無い(裴世清は 筑紫国より以東皆筑紫国に附庸すと報告しており 難波は倭国の一部と認識していた)

(4)-1 旧唐書 倭国伝

旧唐書は 7世紀の倭国と 8世紀の日本国を明確に分けて記載している

「倭国は古の倭奴国なり 京師を去ること一万数千里 新羅の東南海中に在り 山島に依って居住す」

「其の王 阿母氏なり 一大率を置きて諸国を檢索し 皆之に畏付す」

「貞観五年(631) 使いを遣わして方物を献ず 太宗其の道の遠きを矜れみ 所司に勅して歳ごと

に貢せしめる無く 又 新州の刺史高表仁を遣わし節を持して往いてこれを撫せしむ 表仁^{すいそん}綏遠の才無く 王子と礼を争い 勅命を述べずして還る」
「二十二年(648)に至り また新羅に付して表を奉じ以って起居を通ず」
「永徽五年(654)倭国 琥珀瑪瑙を献ず」 (高宗本記)

(4)-2 旧唐書 列伝 劉仁軌伝 (一部に新羅本記、日本書紀の記事)

663年倭国軍は白村江の戦で唐軍のために壊滅させられていたが 白村江は朝鮮半島であるのでその記事は倭国伝に記載されていない

又 旧唐書本記は 顯慶五年(660)に 百済を攻めて滅亡させたことを記載しているが 後に再起した百済を攻めて 麟朔三年(663)に再び破ったことについては記載していないので 白村江の戦を記載している列伝を引用する

「永徽六年(655)百済・高句麗が新羅を攻める 一方唐が新羅の要請にこたえて派兵する」

「顯慶五年(660)唐が10万の兵で百済を攻め滅亡させる 義慈王らを長安へ連行する」

「敗将鬼室福信が倭国に救援を願い出ると共に人質の百済王子余豊璋を取り戻し再起を図る」

「龍朔三年(663)六月唐と新羅が作戦会議を開き 唐の劉仁願と新羅王金法敏が陸軍を率いて周留城を攻撃した 唐の劉仁軌は水軍を率いて熊津江より白江に進んだ 八月白村江の入り口で倭国軍を待ち受けた劉仁軌はそこで四度戦い四度とも勝った 焼いた船の数は400艘を数え その煙は空に達して天を覆い 白村江の海は敵兵の血で真赤になった

百済王余豊璋は独り戦場を脱して逃げ去り 王子扶余忠勝は倭人とともに降った」

白村江で倭国軍を壊滅させた後も 高句麗との戦いが続いていたので 唐の占領軍が倭国(筑紫)にやって来たのは 麟徳元年(664)五月で それも郭務悰等200名余にとどまり、翌年九月にも郭務悰等250名余に過ぎなかった

乾封二年(667)司馬法聰、劉徳高等200名余と捕虜の境部連石積等が筑紫に来る

總章元年(668)高句麗の都が落ちて高句麗は滅亡した

總章二年(669)郭務悰等2000人余が倭国(筑紫)にやって来る

成亨二年(671)郭務悰等600人余と送使沙完孫等1400人余もやって来る この中に捕虜の筑紫君薩夜麻、法師道玄、韓嶋娑婆等を同行させていた

これら2千人規模の唐軍は 筑紫王朝の財宝没収と防護施設の破壊に当たった 大和王朝の難波には 郭務悰等外交使史の派遣のみにとどまった

なお 中国史書の冊府元龜には これらに先立つ666年 唐の高宗の封禪の儀には 日本国でなく 筑紫朝の倭人(唐軍の捕虜)を参加させたことを記している

(4)-3 旧唐書日本国伝

「日本国は倭国の別種なり その国 日辺に在るを以って日本を名とす 或いは日^みう その名の雅^{みやび}ならざるを悪^{にく}み 改めて日本を名とすと

日本はもと小国 倭国の地を併せたりと 入朝する者多く自ら誇大 実を以って^{こた}へえず」

「その国の界 東西南北各々数千里、西界南界は大海に至る、東界北界は大山有りて限りを為す

山外は即ち毛人の国なりと」

「長安三年(703) 大臣朝臣真人 来たりて方物を貢す 真人好んで経史を読み 文を属することを解し 容止温雅なり 則天これを麟徳殿に宴し 司膳卿を授けて本国に還らしむ」
続日本紀の当該箇所(粟田朝臣真人の派遣)の記述は

「慶雲元年(704) 秋7月 正四位粟田朝臣真人 唐国より至る 初め唐に至る時 人あり来たり 問ふて曰く 何処の使人ぞ、と。答へて曰く 日本国の使ぞ、と。我が使^{かえ} 反りて問ふて曰く 此れは是れ、何れの州界ぞ、と。答へて曰く 是れ大周楚州塩城県の界なり、と。更に問ふ 先には是れ大唐、今は大周と称す 国号何に縁^{より}りてか改称す、と。答へて曰く 永淳二年(683) 天皇太帝崩じ、皇太后位に登りて 称を聖神皇帝と号し 国を大周と称す、と。問答略^{ほぼ}了へて 唐人 わが使いに謂ひて曰く しばしば聞く 海東^{たいいこく}に大倭国あり 君子国と謂ふ 人民豊楽^{あつ}にして礼儀敦く行はると 今使人を見るに 儀容太だ淨し 豈に信ならずや、と。語り畢りて去る」
旧唐書日本国伝に戻ると

「開元五年(717) また使いを遣はして来朝す 儒士に経を授けられんことを請ふ 趙玄黙に詔しこれに教へしむ (中略) 得る所の錫^しライ^{ことごと} 尽く文籍を市^かひ海^{うか}に^{うか}んで還る
その偏使朝臣^{なかもろ}仲満 中国の風を慕い 留まりて去らず 姓名を改めて朝衡となし 仕えて佐補闕(七品)、儀王友(五品)を経たり のちに偉尉少卿(四品)、秘書監兼偉尉卿(三品)
上元三年(760) 衡^{ぬき}を擢んで左散騎常侍鎮南都督(三品)とす」

「貞元二十年(804) 使いを遣はして来朝す 学生^{がくしょう}橘逸勢^{たちばなのはやなり}、学問僧空海^{くわんかい}を留む」
ここに出てくる偏史朝臣仲麿(阿倍仲麻呂)には 有名な歌が有る

「天の原 ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも」(古今和歌集 巻9 406)

従来の解説書では 奈良県の春日市内の月として説明されている しかし春日大社の裏^{みかま}の御蓋山は 海拔294mで この山から月が出るとは言えないから その北方にある若草山(341m)がこの歌の三笠山に充てられてきた それでもこの山から月が出るのは限られた場合で むしろ背後の高円山(432m)や春日山(497m)から月が出るとみる方が自然である

古今集のこの歌の前書きは 「もろこしにて 月を見てよみける」となっており

後書きは「この歌は(中略) かの国の明州の海辺の別離の宴で 夜になりて月のおもしろく出でたるをみて詠めるとなむ 語り伝ふる」となっている

古田が高校の国語の授業で生徒から「中国で春日と言えはわかるのか なぜ大和なる三笠山と言わないのか」「ふりさけみればとして 東の日本を見ているが 皆が西を向いているのはなぜか」と質問されて 立往生したことがあり気にかかっていた

後年 古田が博多湾を出て壱岐から対馬へ向かおうと船が西行し始めた時眼前の土地の名を聞いたなら “天の原”の答えが有って 閃いたのは “仲麻呂の歌はここで詠まれた!” ことであった

此処から東を見ると 福岡県の春日市の向こうに三笠山(宝満山869mとも)が見える まわりは低地だから月の出るのは いつも三笠山からだ

仲麻呂は 大和朝から派遣された使臣であるが 筑紫朝の存在を十分承知している年代の人であり 倭国と日本国を区分する唐王朝の認識をも十分承知している立場でもあった